慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ語から見たドイツ人 : ,,individuell" と,,selbstbewusst" から考える
Sub Title	Das Bild der Deutschen hinsichtlich der Bedeutung von ,,individuell" und ,,selbstbewusst".
Author	大谷, 弘道(Ōtani, Kōdō)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.57 (2018.) ,p.61- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新入生歓迎講演会
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20181031-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新入生歓迎講演会〈ことばの世界〉[1)]

ドイツ語から見たドイツ人
――„individuell“ と „selbstbewusst“ から考える――

大　谷　弘　道

話に入る前に，私なりの自己紹介を簡単にしたいと思います。私はこの慶應義塾ではじめてドイツ語を習いました。「なぜドイツ語なのか」とよく聞かれます。「たまたまです」と答えると，聞いた方はがっかりするようです。何か特別のつながりを期待しているからかもしれません。

皆さんも経験したはずですが，大学に入って新しく外国語を習えと言われて，何がなんでもフランス語だとか，中国語を勉強するぞと思った人は数が少ないと思います。よくわからないけれど，とりあえずロシア語にしておこうかとか，スペイン語にするかといった感じで選択をしたと思います。私はそんな感じで第二外国語としてドイツ語を習うことにしました。それが自分の生涯のなりわいになるとは，当時夢にも思いませんでした。人生とは不思議です。

ドイツ人は日本人と似ているか

さて，きょうはドイツ人のことをお話しします。ドイツ人と私たち日本

1）本講演会は教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP），外国語教育研究センター主催により，2018 年 6 月 19 日，慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにて開催された。本稿は当日の原稿に一部加筆修正したものである。

人は似ているのではないかとよく言われます。まじめで，時間を守り，モノづくりに熱心に取り組むとか，いろいろ類似するところをあげたりします。キャッシュレス時代にあって根強い現金志向があること，また強い貯蓄志向，そして一般の人にまで広がらない株式投資など，こんな点でも日本人とドイツ人は似ているかもしれません。しかし似ていない点も数多く存在します。日本と違って，ドイツはコンセプト重視の国。たとえば駅の構造はだいたいどこも同じ。どの駅に行ってもエレベータがどこにあるか見当がつく。日本では，現場の状況が優先されるからでしょうか，駅のエレベータはそのつど探さなければならない。また今どき日本ではマニュアル車を見かけるのは珍しいですが，ドイツではマニュアル車だらけなど，いろいろ思いつきます。

日本に来たことのあるドイツ人は，日本の町の清潔さ，親切な日本人のことをしきりに話します。日本は歴史のある国である。そして独自の文化・芸術を育んできた国，かつすぐれた製品を作る高い技術を持つ国と，まあ日本の印象をいろいろ話します。じつはこれは裏返せばドイツ人が大切にしていること，彼らの価値観そのものだと思います。日本人の評価はドイツでかなり高いです。価値観という点でたしかに似たところがあるのかもしれません。

ただ私たちとドイツ人，相当に違った環境のなかで生活しています。歴史的にも直接の接点はあまりありません。きょうはむしろその違いについてお話ししようかと思います。それによってわれわれ日本人の考え方，価値観が少しでも浮き彫りになればありがたいと思います。

ドイツはヨーロッパの中央部に位置する国です。8000 万人ほどの人が住んでいます。外国系の人が人口の 10％ほどを占めています。3 年前の 2015 年，100 万人ほどの外国人がドイツに入国しました。したがってその割合は現在，優に 10％を超えています。10 人に 1 人は外国人です。日本で外国人の割合が最近急激に増えたと言っても 2％弱と言いますから，

われわれから見るとかなり多くの外国人をかかえています。ベルリンとかフランクフルトなどの大都市では，その割合が相当増えます。

ここにいる皆さんはドイツ語を習っている人が多いかと思います。しかも大学に来て初めてドイツ語を習ったという人が多いと思います。ドイツ語には何かむずかしそうなイメージがあります。おしゃれに響くフランス語とは違った，堅苦しいイメージがあるかもしれません。逆にドイツ語を習うと，いかにも大学に来たという感じがするかもしれません。

ドイツ語を勉強するうえで何がむずかしいかをよく聞かれます。これは人によって違うと思います。「文法がこまごましていてむずかしい」「格変化を覚えるのが大変だ」などと言ったりします。しかし，一番むずかしいのはじつは別のところにあります。それは何か。

コミュニケーション・スタイルの違い

私たちは，人に会うとあいさつをします。当然です。ドイツでも日本でもあいさつは重要です。「こんにちは」と言います。ところがドイツではあいさつのとき，相手の名前をつけるのが基本です。「こんにちは，シュミットさん」となります。相手の名前を一緒に言う，これがわれわれにはじつはむずかしい。ドイツ語に慣れた人でも苦手です。日本語で「こんにちは，田中さん」と言えば不自然です。私たちは相手の名前など意識しないまま話をしています。これは慣れればいいだけの話じゃないかと思います。ところがその現場になると，なかなかそのモードに切りかえることができません。

名前をつけるのがなんでそんなにむずかしいのか。それはその時点で，日本人の価値観を捨てて，ドイツ人の価値観に移り変わることを強いられるからです。私はそう思います。日本からドイツの価値観へ変わるとはどういうことか。まず相手の目を見て，その人と正面から向き合って話をすることになります。それは当たり前でしょうと思うかもしれません。とこ

ろがその結びつきの度合いがわれわれとドイツ人の場合とでかなり違います。パーティ会場などで，知っている人の顔が見えたりします。話の途中でも思わず声をかけたりします。これはご法度です。話し相手になっていた人はひどく傷つきます。どうしても話しかけたいときは，必ず相手に「ちょとすみません」と断って，話を中断してその知っている人に声をかけ，そのあと中断したことを相手にお詫びして元の会話にもどります。相手との会話を突然やめて，別のことをするのは厳禁です。

テレビでニュースを見ていると，国の閣議が始まる様子が映されるときがあります。大臣たちがそろったところに総理大臣が入ってきます。みんな立ち上がって首相を迎え，そろってお辞儀をします。ドイツではどうか。大臣たちが座っているところに首相が入ってきます。ここまでは同じ。首相は個々の大臣に握手して，着席します。病気になると町のクリニックに行きます。診察室で待っていると医師が入ってきます。まず握手を求められます。そして相手の名前をつけて挨拶をします。それから診察が始まります。すべては個と個の関係ができてから始まります。

この名前についてですが，話はそれますが，ドイツにある道路には必ず名前がついています。名前のない通りを私は見たことがない。私有地の道には名前がありませんが，公道には，たとい細い路地であっても名前がついています。存在するものには必ず名前がある。日本の道には必ずしも名前がついていません。日吉駅前の道路は綱島街道といいますが，じゃ理工学部に通じる道は何というかと聞くと，答えられる人はいないと思います。正式の名前が存在しないからです。ドイツでは名前がないということは存在しないということを意味します。

ドイツで私が親しくしている友人がいます。はじめて彼のうちに行ったときはびっくりしました。教会の裏手の小高い山の上に彼の家があって，細い路地を登ってゆきます。その路地に Venusberg という名前がついています。ちゃんと道に標識が出ている。日本語に直すと「ビーナスの丘」

とでも言うのでしょうか。ワーグナーの歌劇タンホイザーを知っている方ならご存じだと思いますが，そこに出てくる名称です。官能の女神ビーナスが住む山のことで，主人公のタンホイザーが官能の世界におぼれ狂って住んでいた世界です。「あんたすごいところに住んでいるね」と言いました。「偶然なんだ」ということですが，その方の名前は，これまた偶然ですがワーグナーといいます。音楽家です。

あるとき町の市長さんと食事をする機会がありました。そのとき，道路の名前について聞いてみました。町の道路にいろんな名前がついているけれど，いったいだれが決めるんだと聞きました。すると町に審議会があってそこで決まるとのことです。じゃ，あそこの Venusberg「ビーナスの丘」というのもその審議会で審議して決めたのかと聞きました。すると，あれは相当昔からある名前で，決めたというよりも決まっていたそうです。百年以上前からそう呼ばれていたのかもしれません。

ドイツでは，名前が重要であること，名前を呼ぶことで相手の存在を認めるということを頭のどこかに置いておいてください。

日本語にならないドイツ語 „selbstbewusst“

さて，ある国の特徴を知るには，言葉を眺めるのが手っとり早いと思います。ドイツ語を眺めていると，日本語にならない言葉がいろいろ出てきます。言葉がないということは，その国にその実態がないということでしょう。日本語に直しようのない言葉，そのひとつに selbstbewusst があります。発音がごちゃごちゃしていますが，selbst というのは英語で self のことです。bewusst は「意識した」という意味ですから，英語では conscious とでもいうのでしょうか。この語はドイツのふだんの生活でよく耳にします。ほめ言葉です。先日ドイツで内閣が新たに組閣されました。新たに大臣に任命された顔ぶれがテレビで紹介されます。紹介の言葉に，この selbstbewusst という表現がしばしば出てきました。「新大臣に任命されたこの方は selbstbewusst な人です」。これをどう日本語にするか。

この言葉の意味を辞書で調べると 2 つの意味が出ています。そのひとつは「自己を意識した」という意味です。もうひとつは「自信のある」という意味がのっています。それに沿って「新財務大臣は自分を意識した人物です」というと意識過剰な人かと思います。かといって「この人は自分に自信のある人です」と言ったら自信過剰の人かと思われるところです。同時通訳などしていて突然この言葉が出てきたらどうするのでしょうか。

この語を英語で文字通り直訳すると self-conscious となります。これを辞書で引くと「自意識過剰の」とか「内気な」とか「自信がない」といった意味で，あまり良い意味ではなさそうです。今度はドイツ語の selbstbewusst を英語ではなんと言うかと調べると self-conscious と出ていないで，self-confident と出ています。よい意味として出ています。似た表現でも意味がひっくり返っています。

元来この言葉はじつは哲学，心理学，社会学，また歴史学などで使われてきた学問上の専門用語です。それが日常語として使われ始めた。日常語になる過程で，意味のアクセントが移動したり，ひっくり返った部分があったのかもしれません。いずれにしろ英語とは全く違う意味で使われています。

「自信のある」という意味の言葉は，じつはドイツ語ですでにあります。したがって問題はなぜ selbstbewusst という言葉があえて使われるようになったかにあります。これまでの「自信のある」という語では言い表せない意味があるからこそ，この語が使われ始めるようになったはずです。それでは selbstbewusst は，どんな意味あいの言葉なのか。これ，じつは辞書で調べても詳しく出ていないんです。もちろん一般のドイツ人に意味を聞いても，明確に説明できる人はなかなかいません。そこでこの言葉が，どういう場合に使われて，どういう場合には使われないか，使われ方の状況をよく見て，そこから意味を類推して，もう一度ドイツ人に聞いて確かめることになります。

それによるとどうもこの言葉は「自信」といっても「社会関係における自信」「人間関係での自信」という意味のようです。いわば社会のなかでの自分の価値，役割の認識といったものと関係しています。したがって「今度の期末試験には，ぼくは自信がある」というときの自信とは異なります。この語の核には人間関係の中での自分意識があります。自分が自分であるという意識，自分が人に縛られない，自立した個であるという意識，また社会にとって自分が有用な人間であるという自覚，それがあって初めて他者との関係に自信が生まれる。そんな背景があるように思います。したがって自己のアイデンティティと深く関係する言葉と理解できます。

その意味をさらに踏み込んで考えると，この人物は「selbstbewusst な人である」，つまり「自信のある人である」と言った場合，ひとつに彼（彼女）は「自己のアイデンティティがしっかりした人である」ということ，「『自分とは何か』という問いに答えられている人物である」ということを意味する。もうひとつは，彼（彼女）が「自分が対社会的に意味がある存在である，社会の中で一定の役割を担っているという自覚のある人である」ということを意味していると考えられます。これがドイツでは人物評価の言葉として使われている。この表現を日本語にするのはかなりむずかしいと思います。

なぜこの言葉を引っ張り出してきたかというと，この語は「個人」と「社会」というものが骨組みになっているからです。じつはドイツ人が言う「自立した個」，またドイツ人が考える社会，まとまりのある「共同体としての社会」と言いますか，この両方とも日本には，どうも存在しないように思います。その結果，この言葉は日本語になりにくい。日本とドイツの体質の違いを考える上でとてもわかりやすい材料になるように思いました。

日本語にならない語 „individuell“

ドイツでは個人を意味する「個」をベースにして社会が成り立っていま

す。この個を表すドイツ語が individuell です。英語では individual です。日本語にも「個」とか「個人」という言葉があるために，そうしたものが私たちの考え方にも存在するように思いますが，これは明治のはじめに無理やり作られた造語です。福澤先生も交えて苦心惨憺して作った産物です。なんでそんなに苦労したのか。それはその言葉に該当する実態が日本に存在しないからだと言われています。存在しないものに言葉をつけるのはむずかしいと思います。たしかに今では「個人情報」とか「個の尊厳」とか言って，けっこうこの言葉はひんぱんに使われています。しかしそれにもかかわらず，この語は今もって日本語に定着していないんじゃないかとよく言われます。

幕末から明治にかけて欧米から入ってきた新しい言葉は，優に 1 万を越えると言われています。言葉というか概念です。ヨーロッパで数百年かかってでき上がった概念を，日本は一気に取り入れた。混乱は避けようがありません。今の時代も次から次に外国の言葉が入ってきます。私などやっとスマートフォンという言葉に慣れたと思ったら，ダイバーシティーとかボラティリティーとか，何の意味かすぐに分からない言葉が飛び交っています。日本語に直す時間がないので，カタカナにしてそのまま使っています。ところが明治期には，実に丹念に新しい日本語を造語しました。その中には「社会」とか「文化」「経済」「科学」といった，まさに現在われわれの生活の骨組みになっている言葉がたくさんあります。

私はドイツの教育に関心があります。教育関係の人に「教育の最終目標は何ですか」と質問することがあります。すると間髪入れずに帰ってくる答えは，「個の成長」，「個の自立」です。しっかりした自分があって，はじめて他の人とコミュニケーションができる。社会生活を始められると考えているようです。自分をしっかり意識して，自分の考えを持ち，またそれを表現できる能力を育てること，これが教育の目指すところであると言います。

とすると私たちの感覚から言うと，自己主張の強い人間が生まれてくるのではないかと思います。自分の考えをはっきり言うことが自己主張に結びつくというのであれば，それはまさにそのとおりです。ドイツ人は小さい子供でも，自分の考えをはっきり言うことが多いです。学校で習ったとおりのふるまいをします。ただこれは自分の考えを明らかにするということで，必ずしも自分を主張して自己中心的にふるまうのとは違います。お互いに自分の考えを明らかにして，その上で妥協点を見つけてステップアップをするといった行動パターンをとろうとします。これは私たち日本人とはかなり違います。当然，他人との接し方は日本人とドイツ人とで異なってきます。

私たちは「人の和」のなかに社会生活が生まれると考えます。自分というものは他の人との関係のなかで決まってくるものです。他の人との折り合いのなかで初めて自分の生きる場所が生まれてくる，こんなふうに考えるところがあります。日本の社会では，単純に自己主張ができないしくみになっています。自分の考えをはっきり言うときには，その前にまわりの状況をしっかり把握しなければなりません。

日本とドイツの違いが現れている具体例をひとつあげましょう。小学校の 1 クラスの人数です。ドイツでは 20 人を越えると，問題が生じます。individuell な関係を作りにくいからと言います。日本では 1 クラス 30 人程度が適切であるようです。その背景に，生徒が集団生活に慣れるためというひとつの教育課題があるようです。

ドイツ人の社会感覚

つぎに社会というものに対する感覚，社会感覚を，少し身近な例で考えてみたいと思います。

最近，日本で宅配便の再配達の問題が起きました。私は日本の宅配便は世界最高だと思います。正確で対応が早い。すべてがきちんとしています。それが過剰サービス，長時間労働などの問題を引き起こしてしまったのか

もしれません。ドイツはその点どうなのだろうか。ドイツも状況は日本と似ています。ただこの再配達の問題がそれほどクローズアップされません。ドイツで一番大きい配送会社は，郵便局と提携して小包配達をしているDHL という会社です。そのほかにも DPD，Hermes といった複数の宅配業者があります。

配達しようとして届け先が不在の場合どうするか。日本と同様に不在票をポストに入れて持ち帰ります。その「不在配達票」を見ると，いくつかの可能性が書かれています。ひとつは指定された近くの郵便局に取りに行く，1 週間という期限つきです[2)]。取りに行くのが遅れると，送り主にもどされてしまいます。もうひとつは指定された宅配ボックスで受けとる，ボックスの番号とキー・ナンバーが記されています。最近はバーコードやQR コードのようです。他の宅配業者は町なかのお店と提携をしていて，指定された近くの店で受けとることができます。そこまではだいたい日本と一緒でしょう。ただそこに 3 つ目の可能性があります。ここが日本と違う。「荷物はお隣さんにあずけてあります」という知らせです[3)]。宅配便の人が配達にきて，不在がわかるとすぐにすることがあります。お隣のうちに行ってピンポーンします。基本的にお隣さんは受けとります。

ところでドイツでは自宅の鍵をお隣さんにあずけることが広く行われています。ドイツの家の玄関はオートロックで閉まります。まちがって鍵を持たずに家の外に出てしまうと大ごとになります。業者に来てもらって開けてもらう，これが安くありません。おまけに時間がかかる。そこで自宅の鍵をとりあえずお隣さんにあずけておく。心配な場合は，鍵を封筒に入れて開けたらわかるように密封して渡します。

2）期限が 1 週間といっても，正確には土・日を除いた「平日 7 日間」。したがって週をまたいで取りに行ける。この期限設定の仕方もドイツ的。目安として「1 週間ほど」ではなく，正確に日数を表示する。

3）これは項目として不在配達票に記載されているわけではない。配達人が用紙の空白部分に，どこに預けたかを走り書きしたものである。

もうひとつ紹介しましょう。ドイツでは冬，雪が降ります。雪が降った朝になると，熱心に雪かきをする人たちの姿が見られます。朝っぱらから熱心だなと思いますが，ボランティアでやっているわけではありません。自宅前の路上で通行人が滑ってけがをした場合，その道に接する住人がその責任を取らなければならない。治療費・賠償費用の支払い要求が来ます。これは法律で定められています。

自分の領域，プライベート領域が自分の家の中にとどまらないで，家の外にまで広がっている。ドイツでは日本と違って，住んでいる町に対して一種の責任感覚が求められているように思います。

じつは日本も昔はそうだったんじゃないか。そんな思いも呼び起されます。それが次第に人が増えてきて，隣の人とあまり接触がなくなってしまった。たしかに都会化という問題があるかもしれません。じつはドイツは中央集権国家ではありません。地方自治によって国が動いています。日本にあるような大都市はむしろめずらしい，ほとんどは中小都市からなっています。都市の 90% は人口が 10 万人以下です。その多くは日本の感覚から言うと，むしろ小都市と言ったほうがいいかもしれません。それでまとまった都市としての機能が発揮しやすい，そういうことは言えるかもしれません。ただ日本と違う点は，まとまりを作るために，いろんな法律のしばりがあります。その最たる例は，建築でしょう。

ドイツでは家を建てるとき時間がかかります。日本にも建築基準法という法律がありますが，日本と比べるとそれがかなり厳しい。そのため役所の手続きに時間がかかります。町の多くはそれこそ 500 年，600 年前から都市としての形を作っていますので，建物の様式，建築素材，色，規模，用途などが厳しく定められていて，自分の好みで勝手に家を建てられません。町には厳格な生活区分があり，土地を持っていればなんでも建てられるというわけではありません。

いったん役所の許可が下りると，建築内容が一般公開されます。自分の家の向かいの家で増築が始まるとします。日本ですと，何が建つのかなと

思いますが，ドイツでは市のサイトで増築の内容をかなり詳しく知ることができます。

役所の許可がおりたので，さあ建設工事が始められるかというと，そう簡単ではありません。役所の手続きに時間がかかることを建築業者も知っていますので，業者は数多くの建築現場を同時に抱えて会社を動かしています。したがって役所の許可がおりたから，さあ建築を始めてくれと言っても，すぐに工事に来てくれません。1 年ほどの工期の遅れは珍しくありません。

ドイツ人の「生活の場」

ここで社会の質，社会生活の場ということに目を向けてみたいと思います。

ドイツの人が日本に来て驚くことがあります。それは企業に社員がつくるオーケストラがあるということです。東芝フィルハーモニー管弦楽団，ソニー・フィルハーモニック・オーケストラ，パイオニア交響楽団，NTT フィルハーモニー管弦楽団とかいろいろあって，それもレベルが高い。また大学にもオーケストラがある。慶應にもあります。これがまたレベルが高い。このレベルを保つには時間をかけて練習しているはずだという想像が生まれます。これは何を意味するか。日本では会社や学校に，ある意味で「生活の場」があるということでしょう。ドイツでは会社は「仕事の場」であって，日本のような「生活の場」感覚があまりありません。おまけに一定の期間働くと会社を変えたりする人が少なくない。生活の場になりようがありません。社会のあり方が若干違います。日本企業には，運動会をする会社もあります。日本はドイツ人にとって想像を絶する社会です。

学校についてですが，ドイツでは小学校が日本と異なって 4 年間です。5 年生になるときに生徒は自分の将来を決めなければなりません[4]。3 つの

4）ドイツの学校教育では，学年を通し番号で表示する。12 年生（以前は

種類の学校からひとつを選択します。ひとつは将来，職人として働く人のコース。もうひとつは高卒コースというか，専門学校につながっていていろいろな職業の専門の知識と技術を身につけるコース。3 つ目がギムナジウム（Gymnasium）という名前の大学進学コースです。日本の感覚ですと，おそらく大学進学コースに生徒たちが殺到するのではないかと思います。ところがそんなことはありません。町によっても差がありますが，大学進学コースを選ぶのはクラスの生徒のせいぜい 40％ほどです。たしかに数十年前に比べるとかなりの増加率ですが，最近の傾向で急激に増えたということはありません。なぜなんだろうかと不思議に思います。

ところで子供の将来を決める学校を，だれが選ぶのか。以前は子供の成績を基礎にして先生と親，それに生徒本人を交えて決めていました。ところが今は本人と親の希望が優先されるそうです。日本でしたら親は少しでもレベルの高い学校に子供を進学させようとします。それには皆さんご存知のように理由があります。ドイツでも子供の将来のことを考えてレベルの高い学校に入れようとする親もいます。そのため一時急激にギムナジウム進学が増えた時期がありました。ただ最近再びその傾向が下火になっているようです。

大学進学コースに入ろうとするとき，ブレーキが 2 つあります。ひとつはこの 3 種類の学校が，レベル的にかなり差があることです。学校に落第があります。2 回落第すると放校になります。卒業しない限りは，資格はもらえません。ドイツは徹底した資格社会です。「高校中退」とか「大学中退」というのは履歴になりません。大学で卒業間際まで勉強したとしても，卒業試験に受からなければ高卒の資格になります。「ベルリン大学中退」と言っても，あまり意味がありません。そのため親たちは子供を無理やりレベルの高い学校に入れることにためらいを感じます。それに子供たちがあとで大学進学を希望した場合，コース変更のチャンスも設け

13 年生）が終了すると，大学入学となる。

られていて，その道が閉ざされていないことも 1 コースに集中しない理由かもしれません。最終的にアビトゥーア（Abitur）という資格試験に合格さえすればだれでも大学に入れます。

もうひとつの理由に，これが重要な点かと思いますが，生徒の生活が学校だけにあるわけでないということです。ドイツでは，学校は日本と違って基本的に勉強だけを担当します。勉強以外には生徒たちは学校にしばられません。日本ではクラブ活動とか学園祭などが学校の仕組みの中にあって，学校生活そのものが生徒たちにとって生活の場になります。レベルの高い学校にはレベルの高い生徒が集まっている。生徒の立場からすると，面白い連中と学校生活を送れるということがあるかと思います。しかしその逆の場合は悲惨です。

ドイツでは課外活動その他で，生徒たちは町のクラブに所属します。どの町も郊外にかなり大きな設備を持ち，サッカー，テニス，水泳，柔道など，生徒たちは自分の好きなところに申し込んで活動に参加し，専門のコーチから指導を受けます。そこでいろいろな学校の生徒と出会います。年齢もまちまちです。安い年会費を払えば，何をやってもかまいません。つまり子供たちにとっては，学校よりもむしろ町にあるクラブのほうがよほど生活の場になります。私の知っている中学生の女の子は乗馬クラブに通っています。郊外にある馬場まで近くに住む大学生が車で拾って，連れて行ってくれます。同年代の子供たちとだけでなく，お姉さん，お兄さんたちともそこで交流します。

それ以外にも町にいろいろな活動があって，子供たちは複数の活動の場に参加して育ってゆきます。町に祭りがあるときは，そうした町の活動グループが主体になってかかわってゆく。学校ではなく町がひとつの共同体の基盤，生活の場になっています。

クラブにコーチがいると言いましたが，これらの人は一部の専門職を除いて，ほとんどボランティアとして指導にかかわっています。ここにひとつのポイントがあります。町の住人には住んでいる社会に対する責任とい

うか，貢献意識があります。このような共同生活の場をドイツで「社会」と呼んでいます。ドイツの町は，われわれになじみの深い，内向き傾向の，いわゆる「世間」の集合体としてあるのではなく，individuell な個の感覚を持つ市民が作る，広がりのある共同体になっている，そんな印象を持ちます。

ところで最初にお話ししましたが，ドイツは 2015 年の 1 年間だけで難民を 100 万人入れました。こんな大人数の外国人を国内に入れてだいじょうぶなのかと思いますが，これについては今後歴史の判断を待つことになるでしょう。それとは別に私が注目するのは，ともかく 100 万人の外国人を受け入れることができたということ，これは驚異的です。これがなぜ可能だったのか。これはお金があればできることではないと思います。これほどの数の人間を一度に受け入れるには，対応できる人間がいるかどうかが鍵になります。難民の受け入れを可能にしたのは，各都市のボランティア活動の基盤がフルに機能した結果だと思います。これが日本だったらどうなるだろうかと思います。100 万人の外国人を一度に受け入れる基盤が，果たして日本にあるのかどうか。

individuell の成り立ち

ドイツということでここまでお話してきました。じつはドイツはヨーロッパという広がりのある土壌の中で歴史を作ってきました。ドイツだけを切りとって話をするということは，ほぼ不可能なところがあります。そこで枠を広げてヨーロッパの話をします。先ほどから individuell についてお話ししてきましたが，この個人感覚は昔からあるものなのか，それとも次第に生まれてきたものなのかという疑問がわきます。これについては阿部謹也さんという方が，ヨーロッパにおける個人の成立について詳しく紹介しています[5]。阿部さんはすぐれた歴史家です。彼はヨーロッパで個人

5）阿部謹也『物語ドイツの歴史――ドイツ的とはなにか』中央公論新社

が成立したのは 12 世紀であると明言しています。それ以前は，ヨーロッパでも日本と同様，自分という存在を他人とのつながりの中で確認したということです。つながりとは家族との絆であったり，主人に対する忠誠という意識であったり，領主の住民に対する庇護の関係です。ところがある時点でヨーロッパに大変なことが起こります。

ヨーロッパはご存知かと思いますが，キリスト教を基盤として歴史を作ってきました。そのキリスト教の教会が，人々に告解をすることを定めた。告解とはキリスト教で，自分の罪を神の前で打ち明けて罪の許しを求めることです。今でもカトリック教会には特別の小部屋があって，そこで壁の向こうにいる神父さんに自分のことを話します。それを聞いた神父さんはそれを他言してはいけません。たとえ「じつは私は人を殺しました」と言われても黙っていなければならない。これが性別に関係なく行われはじめた。そのために自分の内面を他人の前で語るという異例のことが始まった。これが個人意識の形成に大きな意味を持ったということです。これは大変興味深い指摘です。

ドイツ語にならない日本語「対談」

individuell なあり方が具体的にどんなところに現れるのだろうか。人間関係のあり方が問題の中心にありますから，当然話し方に現れます。日本語にならないドイツ語を紹介しましたので，今度はドイツ語にならない日本語を紹介しましょう。それは「対談」という日本語です。対談というのは二人の人がテーマを決めていろいろな角度から問題の本質を探ってゆく，ひとつの会話形式です。日本では大変好まれていて，ひとつの文学ジャンルにもなっています。対談集は肩の張らない読み物ですので，私も旅行に行くときには数冊持ってゆきます。対談を読んでいると視野が広がって，自分の固まった考え方がゆるんでくるのを感じます。

話をするのは二人ですが，一人が話し出すと，それを受けて次の人はだ

（中公新書），1998 年。

いたい同じ方向に話をつぎ足してゆきます。相手の考えを引き受けて発展させる，二人の人がまるで一人の人が話しているように話は展開します。二人の会話のつなぎの部分はたいてい，「そうそう，そのとおりですね」という表現がつづきます。たまに「なるほど，そういうこともあるのか」とかいろいろバリエーションはありますが，論点は同じ方向に向かいます。

それに対しドイツ人の会話（Gespräch）はちょっと違います。会話の接続部分は「そうそう，そのとおり」ではなくて，基本的に「そうかしら」となります。話し手が相手と異なる点を意識して語ろうとするように思います。重心のかけ方が違う。相手の考え方に沿うのではなくて，あい対する姿勢を示します。ここに彼らの individuell，個別であろうとする意識が働いているのではないかと私は思います。ドイツ人と話をしているときに，こちらの話に相手が乗ってこないことがあります。ひょっとすると自分に敵意を持っているのではないかと思ったりするかもしれませんが，そんなことはありません。彼らは彼らの話し方の手順に従って，話をしているだけです。

ところで，日本人の対談ですが，対談者の間で対立する意見が出てこないかというとそんなことはありません。違った考え方，とらえ方もどんどん出てきます。ただ対立する印象を与えないような提示の仕方をします。つまり相手の考えを補足するという形をとります。その場合補足された側は「なるほど，そういったこともありますね」「確かにそうだ」とか言って対立軸を作りません。

ドイツのほうはどうか。対話は日常の生活でありますが，「対談」といった改まった形でみんなの前で二人の人が向き合って，話しを進めることは極めて少ないです。あることはありますが，ドイツ人にとって話しやすい形ではないようです。新聞，テレビ，ラジオなどメディアで二人の人が話す場合，一人が質問をして，一人がそれに答えるインタビューがほとんどです。それとは違って，複数の人が参加する討論番組は数多くあります。

こうした討論番組はテレビの夜のゴールデンアワーに放映されます。視聴率も高いようです。ドイツ人が議論好きなことがよくわかります。

ドイツ人の討論

ドイツの討論番組を見ていて，なかなかついていけない部分があります。それは，誰かが発言している最中に，相手の発言をさえぎって発言する人があることです。われわれの感覚では最後まで話を聞けばいいじゃないかと思ったりします。じつは，これは「途中質問」（Zwischenfrage）ということでドイツでは許されています。不明の点があれば，相手の話が途中でも，それをさえぎって発言してかまいません。むしろそれによって話が活発になって，面白くなると感じているようです。

もっとついていけないのは，ときに二人の人が同時に話しはじめる事態になることです。一人の討論者が自分の考えを述べている最中に，その論拠が当てはまらない，またロジックに矛盾があると思われるとき，他の討論者がそれを指摘しはじめる。その場合同時に二人が発言しているわけで，討論者の二重唱のように聞こえます。どちらの話を聞いたらよいのか戸惑いますが，当の討論者たちは話しながら相手の指摘にも答えていますから，話しながら相手の意見を聞くという芸当をしているわけです。視聴者も両者の意見を同時に聞かなければならない。私などなかなかそれに慣れません。何を話しているのかがさっぱりわからない。ドイツの番組の多くはインターネットで，あとで再度見ることができますので，翌日見直して，その部分を片方ずつ聞いて内容を理解します。

ふだんの生活の中で，ドイツ人と話をするとき，注意しなければならないことがあります。ドイツ人が何か自分の考えを述べるときは，彼らは聞き手がきっと自分なりの意見を言ってくるに違いないと考えて話します。聞き手が何も言ってこないと不安になるようです。これはとくに日本人が聞き手になっているときに起こりがちです。黙ってじっと聞いていると，

「なぜ何も言わないのだ。あなたはどう思っているのか」と問いかけてきます。または「私の話し方が早すぎたか。わからないならばもう一度最初から話すが」と言ったりします。同じことをまた15分もしゃべられたらかなわないと，適当に質問をしたりして，反応しなければならない。会話はシーソーの力学が働く場，つまりバランスゲームであると考えているところが彼らにはあります。

会話の構造

ここで会話の構造をざっくりお話ししましょう。人が出会うと，会話が始まります。会話はあいさつから始まります。「お元気ですか」と，まずお互いの安否を確認し，「暑くなってきましたね」とか，「明るくなるのが早くなってきましたね」とか，共通する場の状況を話題にして，お互いの存在を確認するやりとりがあいさつです。その後，情報交換の場に入ります。「お隣の猫が，家を出たままもどってこないらしい」とか，「角のケーキ屋さんのチーズケーキがおいしい」とか，お互いの生活の場の情報を交換することで交流感覚が温まります。その後，腰をおろしたり，飲み物が前に出たりすると，ドイツ人の場合，意見交換の場になっていきます。意見交換の場に入ると，考え方のシーソーゲームが始まります。そこではindividuell「個別」にふるまおうとする力学が働きます。相手の考え方と異なる部分を意識して話を進めたりする。しかし意見交換のステージにならない限りは，ドイツ人も同調する発言を続けます。相手の話を素直に聞き，相手の話に歩調を合わせます。

表現世界の違い

じつは，ドイツの文化・芸術分野もこうしたコミュニケーションの土壌の中で生まれてきた産物と言えます。クラシック音楽などわれわれに人気の分野もありますが，少々とっつきにくいものもある。たとえば映画です。

ドイツの映画は日本でなかなかはやりません。映画配給関係の方々が大

変苦労されています。ヒット作品が少ない。なぜだろうか。日本人の目で見ると，ドイツ映画は面白くない。そもそも会話が多い。それもいつも喧嘩ばかりしている。われわれにはそう見えます。場面が家庭でも会社でも対立場面をことさら強調して表現する。ところがドイツ人にとって，じつはそれが面白い。対立する会話が面白いんです。いったん対立が解けて二人が仲直りしたと思ったら，別の問題で再び対立場面に入る。ドイツのドラマの多くはその繰り返しです。

ドイツの俳優さんと話をしたことがあります。日本と違ってドイツではほとんどの俳優さんは俳優学校を出ています。トレーニングを受けて俳優の世界に入ってきます。トレーニングの中に対立場面の感情表現があるそうです。感情をあらわにして大声で相手をどなる，これができないと俳優になれないとのことです。

先日，日本のドラマを見たというドイツ人と話をしました。ドラマの中で若い男女が会話しています。女性が口を開きます。「なんで黙り込んでいるの？」するとテーブルでグラスを握りしめている男が言います「俺は今怒っているんだ」。そのドイツ人の質問です。「日本人は怒っているとき黙るのか」。ドイツ人にとって理解不能の場面のようです。

さて，ドイツ人のコミュニケーション・スタイルをいろいろお話してきました。これはドイツ人のスタイルがすぐれているとか，劣っているとかを紹介するためではありません。世界の人の行き来の多くなってきた現在，なんとかお互いのコミュニケーションをうまくとれないか。そのためにはお互いがどこを向いて考えているのか，どういう価値観の中で生きているのか，社会のあり方をある程度知っておく必要があるのではないか。そんな思いがしています。

日本では小売店の店内に入ると，お店の人から「いらっしゃませ」と声がかかります。客は黙って店内に入ります。店を出るときも黙って出ます。背中に「ありがとうございました」という声が聞こえる。ドイツは違いま

す。店に入るときには客のほうから「こんにちは」とあいさつをします。店を出るときも「さようなら」と店員さんに声をかける。ドイツ人の考え方では，たとえお店であっても，他人の領域に入るわけですから，当然あいさつをするのがあたりまえとなります。小売店に無言で入ってきて，また無言で出てゆく人を見るとドイツのお店の人は不気味に感じるそうです。あわてて「何かお手伝いしましょうか」と声をかけてきます。するとこんどは，われわれ日本人は暑苦しく感じます。静かにお店のものを見たいだけなのにうるさいなと思います。生活の違いというか文化の違いは，いろいろな部分で現れます。

今はグローバル化の時代と言います。一般に経済の動きからそれが語られることが多いです。しかし私は文化的な部分のほうが，ずっと速く進んでいるのではないかと思います。

今は新しい情報がほぼ同時に世界に発信されます。ドイツで，町のメインストリートにあるブティックの女主人の方と話しをしたことがあります。「仕入れはどういうふうにやっていますか」と聞いてみました。彼女によると，商品は 1 年先に注文を出すとのことです。そのためにいろいろ情報集めに苦労する，流行を的確にキャッチするのがやさしくないとのことです。

その方の話によると，「いまは流行の先端を知るためにはパリではなく，日本の渋谷とかいう町の駅前交差点の状況を見る必要があると聞く。あなたは渋谷というところに行ったことがあるか」というので，「結構よく行っています」と言うと，ひどく感心されました。

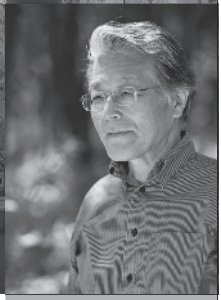
そろそろ予定の時間です。私の話はこの辺で終えることにします。ご清聴ありがとうございました。

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project（HAPP）

新入生歓迎講演会〈ことばの世界〉no.4

ドイツ語から見た ドイツ人

～“individuell”と“selbstbewusst”から考える



［講　師］

大谷 弘道（慶應義塾大学名誉教授）

［ディスカッサント］

小林 拓也（フランス語教室／理工学部）

小菅 隼人（司会／英語教室／理工学部）

2018年**6**月**19**日（火）**18**時**15**分 ― **20**時

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

入場無料・予約不要

対象：塾生・一般、特に新入生を歓迎します

講演は日本語で行われ、ドイツ語・フランス語・英語の予備知識は必要ありません。
40分のレクチャー、20分のダイアローグに続いて
フロアの皆様と共にディスカッションを行います。

主　　催 ● 教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）、外国語教育研究センター

お問合せ ● HAPP事務局 hy-happ@adst.keio.ac.jp、小菅 隼人（理工学部教授） hamlet@keio.jp

| Profile |

大谷 弘道

慶應義塾大学名誉教授
元慶應義塾高等学校校長

東京都出身、1977年慶應義塾大学独文学研究科博士課程　アーヘン工科大学、フライブルク大学留学、専門は社会言語学。
「NHKラジオドイツ語講座」「NHKテレビドイツ語会話」「NHKまいにちドイツ語」講師。